

「バイオ重油」を量産、アスファルト製造時のCO2削減へ 前田道路

松浦新 2022年8月9日 18時40分



アスファルト合材をつくる際のCO2排出を抑えるため、「廃食油」を活用する前田道路の工場=2022年7月19日、北海道江別市



道路工事大手の前田道路が、舗装用のアスファルト合材をつくる際の燃料に、再生可能な「バイオ重油」を採用することが分かった。ベンチャー企業の技術を独占的に導入し、今年度から量産する。従来の重油から置き換えることで、二酸化炭素（CO2）の排出を大幅に減らすねらいだ。

アスファルト合材は製造時に160度前後まで加熱する必要があるため、燃料に重油を使う。前田道路はこれを植物油の搾りかすや、廃棄する牛乳など、食用以外の油分を原料にしたバイオ重油に切り替える。

2年後に34工場で計1万3千キロリットル利用

ベンチャー企業のバイオ燃料 技研工業（広島市）の技術を導入し、子会社が約10億円を投じて工場を建て、生産する。価格は重油と同じぐらいの水準で、熱量や保管などの扱いやすさも重油と同等だという。

今年度は広島市の合材工場で3300キロリットル使う予定。2年後には西日本の34工場で計1万3千キロリットルを使う予定で、CO2の排出量を年約3万6千トン削減できるという。その後はさらに増産し、全国の96工場で使う計画だ。将来的には社外への販売も視野に入れている。

アスファルト合材の製造には大量の重油を使うため、CO2の削減が課題になっている。これまでも一部の工場で、使用済みの天ぷら油など再生可能な燃料が活用されてきた。（松浦新）